



第 52 回 「木に学べ」の言葉

西岡常一「木に学べ」(小学館文庫、小学館、2003年12月)はその副題「法隆寺・薬師寺の美」からわかるように、長年にわたりこれらの古寺の修復に携わった宮大工の棟梁、西岡常一氏の仕事ぶりを作家の塩野米松氏が聞き取ってまとめた書籍です。

私は以前より建物模型(名もない神社、幼少期の自宅、歴史遺産建造物など)を作るのをささやかな趣味にしておりました。現地に赴いて実物を写真撮影しそれを基に設計図を描き、素材を集め手作りする稚拙・素朴な模型です。このような中、昨年たまたま法隆寺の木型模型が通販されていることを知り、購入し作ってみました。いわば木製のプラモデルのようなもので、これは上記の「手作り」ではありません(作った模型の写真を末尾に掲載します)。素材から作るのに比べ簡便ではありましたが、しょせん組み立て模型なので工作の達成感と完成品の味わいに欠ける感じがしました。しかしこれを作ることにより法隆寺の構造について少々学ぶことができました。その後、最近になって本書に巡り合いましたので、私の模型作りの経験と比べつつ興味深く読みました。

本書ではまず木の使い方について記しています。法隆寺が1300年後の今も残っているのは檜を使ったからだそうです。日本は湿気が多く、また木にはある程度の湿気が必要なことから日本の建築には日本で育った木が一番よいのだそうです。さらに法隆寺は木の性質をよく見抜いて組んでであると指摘しています。現代の建築方法のように何でも規格に合わせることは良くなく、「堂塔の木組みは寸法で組まずに木のクセで組め」の口伝に従うのです。すなわち棟梁に与えられた使命は木のクセを見抜いて木と「話し合い」、それを適材適所に使うことです。これは理系の研究についても言えますね。研究者は自然現象、実験事実を注視し、それらと「話し合う」ことにより新しい科学技術を作るのです。

法隆寺、薬師寺のように世界で唯一の歴史的建築物の修復は1000年以上にわたり大工が積み上げてきた伝統を踏まえるので、西岡氏は現代建築学の学者らの考え方としばしば対立し「法隆寺の鬼」と呼ばれたそうです。西岡氏は「飛鳥時代には大工が全て作ったのであり、伝統を我々が踏まえているのだから我々のやっていることは間違いない。学問は材料に及ばない。檜の持つ力が計算できないのに鉄の方が檜より強いなどということはできない。」と話しています。これらはオフシエル科学を理解しないオンシエル科学の研究者の状況と似ていますね。オフシエル科学は実験結果を踏まえているのだから間違いありません。これと補完的なオンシエル科学の理論では光・物質相互作用を扱うことができないので、オフシエル科学の実験結果を理解することが難しいのです。

西岡氏はまた、「現代の建築学は実際の建物を作ることに重点をおかず、様式論で話を進めている。ただし科学技術は日進月歩なので今日の正論は明日の正論ではありえない。それにもかかわらず今日を科学ですべてを律しようと考えがちなのが学者である」と批判しています。これはオンシエル科学にもあてはまります。オフシエル科学を理解しないのは、その実験結果を注視せずオンシエル理論の枠組みの中で議論し

ているからです。オンシエル科学はすでに普遍的な正論ではないことがオフシエル科学の出現によりすでに明らかになっているのですが。

さらに西岡氏は現代の技術を「自然の法則を人間の力で征服するもの」と位置付け、これに対し「歴史的建築物の建造、修復は技術ではなく技法なので、自然の生命の法則のまま活かして使うことが必須」と述べています。なおこれらの建造、修復の方法はバイオミメティックとは異なります。バイオミメティックは生物の機能、性質をまねて新しい機械などを作る技術で、このような機械を再現性良く量産することを目指しているようです。一方、西岡氏の場合は木という自然にあるもの、いわば生物を素材として使い、加工します。あたかも和食の魚料理のように。すなわち魚をまねるのではなく、魚をうまく料理して、「いただきます」と言って食することに似ています。すなわち木を「うまく料理」するのです。その結果量産ではなく世界で一つしかないものを作ります。これは遺産修復なので当然のことです。ところでこれをヒントに、非生物から優れた性能を持つ新しいロボット、機械などを作ることができないでしょうか？この場合量産する必要はなく高価でもよいのです。これは素材のクセを見抜き、素材と「話し合い」つつ、それを適材適所に使う新技術なので、上記のバイオミメティックとは異なり、individualities とでも表現しましょうか。

次に西岡氏は人の使い方について述べています。まず自戒をこめて「職人は65歳が限度。なぜかという大工道具としての刃物の研ぎができなくなるから。本当に研げるのは50歳代まで」と述べています。理系の研究でも同様で、シニアの学者が自身の過去の業績に囚われ、古い考え方を振り回すのでは新しい科学の進歩を妨げます。また、「法隆寺東院の伽藍を復興したのは必ずしも位の高い人ではなかった」とも述べています。要するに修復を実践したのは大僧正のような「偉い」人ではなかったそうです。現代の研究においても「何をしているのかわからないけれど偉い先生」というのがいますが、この人たちはもはや研究を実践していません。

そして西岡氏は若手の育成について「人には起用不器用がある。器用な人はどんどん前へ進んでいくが、本当のものをつかまないうちに進んでしまうこともある。不器用な人はとことんやらないと得心ができない。こんな人が大器晩成となる。器用な人より少し鈍感で誠実な人の方がよいのだ。」と述べています。同様なことは寺田寅彦、「科学者とあたま」（寺田寅彦随筆集第四巻、小宮豊隆編、岩波文庫、1948年5月）にも記されていますが、研究でも「努力の継続は力になる」があたりまえです。

最後に西岡氏は自分の過去を振り返り、「法隆寺で一緒に仕事をした大工は60人ほどいたが、宮大工で残ったのは自分一人だけ」と述べています。「学ぼうという心がないと、ただ仕事をするだけに終わる」のだそうです。これは理系の研究にも言えます。若いときに単発的な研究する人は何人もいますが、それを継続して大成する人は多くありません。研究しようという心がないと上記のような「努力の継続」がなく、先行する研究を学ぶだけで終わり、新しい研究を「作る」には至らないからです。

また、日々の仕事をする際、「実際の作業を始める前の仕事の段取りが大切」とも述べています。研究、特に実験を始める際にも段取りが大切です。これは私の趣味の建物模型作りでも実感しています。模型を作るときの段取りをうまく考えないと、完成に至る過程で苦労が増えてしまうのです。



写真1 法隆寺模型（尺度 1/150）

前面に中門と回廊。その後ろ右側に金堂。左側に五重塔



写真2 模型の後ろ側から撮影したもの

左側に金堂。右側に五重塔。その後ろに中門。